

東京バッハ合唱団 月報

[第 733 号] 2023 年 7 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.733

July 2023

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

書評と紹介

A・クレメント編 『J・S・バッハ所蔵の A・カロフ聖書註解』

小海 基 (団員、荻窪教会牧師)

J・S・バッハが亡くなった時の遺品の蔵書リストに、1531 年出版のボヘミア兄弟団の讚美歌集、J・J・フックスの対位法理論書と並んで、3 巻本の A・カロフ [カール] の『聖書註解書』があったことは、有名な話です。バッハが亡くなった当初こそバッハ家で保管されていましたが、その後散逸し、行方不明となっていました。

私たち東京バッハ合唱団に属する者たちは、バッハのカンタータに触れるたびに、カンタータや受難曲、オラトリオの台本はバッハ自身が書いたものでなく、さまざまな台本作家（その中には当時としては珍しい女性の台本作家までいた！）がいて、しかもバッハ自身が、単にそれらの台本作家の台本そのままに譜面を作曲していったというのではなく、自から積極的に意見を加え、台本を書き換えさせもしたという事実に出会います。あのカンタータや受難曲、オラトリオ等の音符の圧倒される発想は、台本作家と対等に言葉を操るほどのバッハの聖書知識や信仰があつてこそなのであつて、それがどこから来ているのかというのは、私のような牧師や、キリスト教信者、神学者……といった人たちにとって本当に興味津々だったわけです。もちろん当時の説教者たちの説教は影響しているのでしょうが、バッハの伝記を読んでいくと、当時のライブツィヒの教会当局と必ずしも関係が良かったわけではなかったことも知らされます。教会当局はバッハのカンタータ等の歌詞内容

にクレームをつけ、書き換えをも命じた、といったいざこざも起こしていたようです。

そこで昔から、遺品目録にあつたはずの 3 巻本『カロフ聖書註解』に何か秘密があるのではないか、そこにあるバッハの書き込みに、当時の教会当局のゴチゴチの正統主義的説教者を超える、「敬虔主義」的な自由で胸を打つ解

釈の書き込みがなされているのではないかと、噂されていたものです。

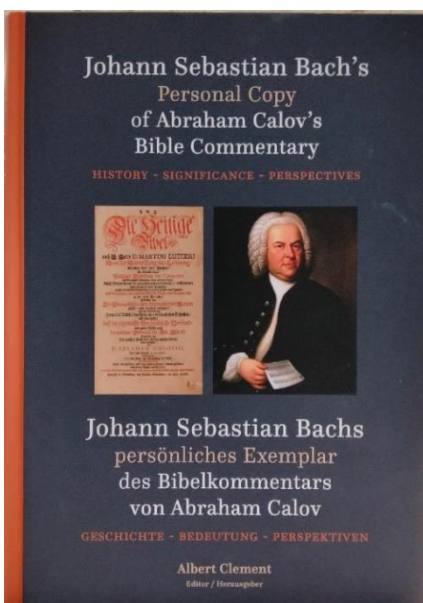
バッハの旧全集、新全集が出版され、今後よほどのことのない限りもうバッハの「新発見」などないと世界中のバッハ研究者が決めつけていた 20 世紀末の 1997 年 10 月、アメリカのミズーリ州セントルイスのコンコルディア神学校図書館に、ほかでもない『カロフ聖書註解』があるらしいことがわかって大変な騒ぎとなります。

ここで私自身のことをちょっとだけ述べさせていただきますが、私は 1989~91 年にかけて、荻窪教会からの支援を受けてアメリカのミズーリ州セントルイスにあるイーデン神学校に留学しました。発見現場のコンコルディア神学校のすぐ隣の神学校です。アメリカ生まれの大神学者、ラインホルドとリチャード・ニーバー兄弟の出身校であるイーデン神学校は、リベラルな神学校ですが、コンコルディア神学校というのは、ドイツ本国のルター派も驚くほどのガチガチのルター派正統主義である「ミズーリ・シノッド」に属している神学校で、ドイツ移民の多いセントルイス市内のルター派の牧師たちも、「ミズーリ・シノッドの教条主義の連中とは付き合わない」と吐き捨てるように言われていたのを思い出します。セントルイス市内のキリスト教各派の神学校は交流が盛んで、カトリックや正教会、ユダヤ教まで共同で修養会を催したりもしていました。また、当時は中南米の軍事独裁政権下でカトリックの修道士やシスターが惨殺される事件が続いたものですが、一方のコンコルディア神学校からは、抗議の祈祷集会にも顔を出すことはありませんでした。キリスト教系カルト集団のように自閉的なグループでした。

そうはいつてもコンコルディア神学校は大変なお金持ちで、その図書館を覗きに行くと世界にいくつも無い「グーテンベルク聖書」の完本や、貴重本の宝庫で驚かされたものです。中西部で毎年のようにトルネード（竜巻）が起こるたびに、イーデンの級友たちと

月報 2023 年 7 月号 CONTENTS

- ・エーデルワイス (大村恵美子) / 次回公演予告 …p. 3
- ・連載: 退屈するのはいそがしい [29] (大野博人) p. 4



■原書: アルバート・クレメント編「ヨハン・セバスチアン・バッハ所蔵の Abraham Calov 聖書註解: 歴史 - 意義 - 展望」Amersfoort, 2023 (写真: 編集部)

「コンコルディア神学校」図書館が壊滅的打撃を受けたら「迷わずにあの貴重本を盗ってこよう。一生食べるぞ！」などと不謹慎な冗談を言い合ったものです。もっともコンコルディア神学校が吹き飛ばされるよりも、イーデン神学校の方がよほど吹き飛ばされ易かっただろうと今にしてみると思います。「ミズーリ・シノッド」は戦後日本で「ルーテルアワー」というラジオ番組のスポンサーをしていたくらいお金持ちなのです。まさかあの貴重本の中に3巻本『カロフ聖書』があったとは、当時の私は気づきもしませんでした。

さて当時、この『カロフ聖書註解』を全世界に公開すべきで、ぜひ最新の技術を使ってファクシミリ版を作らせてもらいたい、とバッハ研究者たちがコンコルディア神学校に申し入れるのですが、そうした「ミズーリ・シノッド」の閉鎖的体質もあって、3年たってももちが明かない日々が続きます。2000年にユトレヒトで開かれた「バッハ・シンポジウム」の主要主題となったほどです。「コンコルディア図書館からどこにも移さず、直接に写真撮影したものをデジタル化して…」と厳重な条件を付けられ、原本ファクシミリ版の最初の版が作られたのは、実に2008年に至ってからのことでした。

こうして最新のデジタル技術が駆使されて出来上がったファクシミリ版『カロフ聖書註解』は現在銀座の教文館で展示されており、日本の研究機関やいくつかの大学でも購入され、閲覧できるようになりました。ただしこの3巻本は70万円を超える高額なファクシミリ本で、貧乏牧師の私のような者が入手できるような代物ではありません。もう数年前から教文館の洋書目録に出るたびにため息をついていたものです。

しかし今回出されたのは、プロジェクトの中心となった編者 A・クレメントたちの作った『カロフ聖書註解』の解説本なのです。バッハ自身の書き込みの主要な物もオールカラーで収録されていますし、歴史・意義・展望に章分けした詳細な解説もなされています。さすがは「世界のバッハ」というべきで、本書は、本文が英語、独語の対訳、巻末に蘭語、日本語を加えた4ヶ国語の要約を付した出版となっています。また、値段も2万数千円で、貧乏牧師もぎりぎり無理できる値段です。

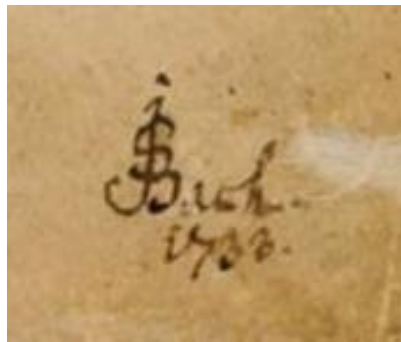
それにしてもなぜアメリカのセントルイスのような所まで流れ着いたのでしょうか？ 大西洋を渡ってアメリカについてのは19世紀半ばのようです。フィラデルフィアの古書店に売られていた3巻本『カロフ聖書』に目を留め、購入したのが1836年のことで、ドイツのシュトゥットガルトからアメリカに移民として渡った馬車職人のルートヴィック・マイケル・ライケルという独身の人だったようです。彼は2年後に結婚し、家

庭を築いて、ミシガン州フランケンムートに移住したのが1847年。1879年に彼が亡くなってこの3巻本を相続したのは末っ子のレナードというのですから、誰もこのドイツ語で印刷されている『聖書註解』がバッハの持ち物であるとか、バッハのサインや書き込みがあるということに気づいていないことは確かなようです。相続後56年間レナード・ライケルは知らないままである内に、3巻がばらばらにされてしまいます。

ただ、レナード・ライケルが代々保守的な「ミズーリ・シノッド」に属していて、彼の妻エミリーのいとこに牧師もいたのが奇跡的に幸いとなったのでした。

ドイツ本国ではヒトラーのナチ党が政権を掌握した翌年の1934年6月に、ミシガン州フランケンムートで開催された「ミズーリ・シノッド」地区大会に参加した妻エミリーのいとこの牧師（当時デトロイトで牧会していた）クリスチャン・G・リーデルを自宅に泊めた折に、「うちにはこんな古いドイツ由来の本があるのよ」と見せられたのが奇跡的発見となるわけです。この妻エミリーの行為はアメリカで生活した経験のある人は思い当たるでしょう。古いティーセットやナイフやフォーク、古い聖書みたいな物（日本のお宝や骨董ほど古いわけでも由緒あるわけでも無いのですが）を、新大陸のアメリカ人たちは本当に大切にしている、自慢げに披露するものです。

立派だったのは妻のいとこのリーデル牧師です。表題紙の右下に書かれていたのがバッハのイニシャルを絡み合わせたモノグラムと1733年の年号で



【左図】、「これはひょっとするととんでもない書物かも知れない」と大騒ぎになったわけです。

「他に2巻あるはず」と大慌てで家探しして、屋根裏部屋からようやく他の2冊も発見したのです。かつて日本で出版された『バッハ叢書』の「資料版」のようなものがあつた時代でもないのに、本当にこのリーデル牧師の嗅覚は鋭いものがあったと思います。「ミズーリ・シノッド」の牧師関係者によって、中心神学校であり音楽も盛んなセントルイスのコンコルディア神学校に寄贈となるのですが、なまじそんなところに収まってしまうと、他の「グーテンベルク聖書」などの国宝級の貴重本の中に埋もれてしまって、冒頭で書いたようにほとんど調査もされず、顧みられなくなってしまいます。21世紀に入って「バッハ・シンポジウム」で研究者から突つかれても、重い腰をなかなか上げなかったコンコルディア神学校図書館ですが、思わぬところから追い風が吹きます。2010年の夏に、ドイツの古美術品市場に、1704年出版の『メリアン聖書』が出品され、そこに「I S Bach | 1744」と署名されていることが分かり、パッサウに住むコレクターが高額購入し、2011年に同書をライブツィヒのバッハ資料室に永久貸与するというニュースが世界中を駆け巡ります。

「バッハの遺品目録にもあった『カロフ聖書註解』はどうなっているのだ？『メリアン聖書』どころではない！」という声が世界中のバッハ研究者から巻き起こったのは当然の事でした。

『カロフ聖書註解』のタイトルページにはバッハ自ら書いた「1733年」という年号があります[前ページ]。ちょうど彼が、教会当局の権威的扱いに疎外感を抱いてカンタータ作曲に区切りをつけ、ドレスデン宮廷職へ変わろうと望んだ頃の日付です。『カロフ聖書註解』の書き込みにはそうした思いと共感がライトモチーフのように繰り返されているのが注目されます。特に仕事、金銭、寛大さに関する箇所印がつけられ、3巻の内の4分の1近くの書き込みが旧約聖書の「コヘレトの言葉（伝道の書）」に集中しています。ルターやカロフの解釈する「コヘレトの言葉（伝道の書）」観は、富の危険、物質的利益の虚しさ、自分の仕事を結実へと導く神への信頼、隣人への寛容の言葉に大きく共鳴しており、またモテットや1736年の《マタイ受難曲》浄書譜の年代決定にも寄与するものがあるようです。

以上、まだ入手したばかりで、本文というより日本語で読めるところをパラパラとめくりながら紹介させていただきましたが、「21世紀のバッハ研究」に大きく影響する本書と、原本そのもののファクシミリ版の刊行により、今後諸説、新説が世界中の研究者から発信されることでしょう。

<了>



エーデルワイス



■エーデルワイス
<https://i.pinimg.com/originals/e1/06/de/e106def95fe77b1ccfe2135531f3d08a.jpg>

大村 恵美子 (主宰者)

小さなドイツ語の辞書には、edel: 高貴な・気高い・高潔な・端麗な・優良な、weiß: 白い。Edelweiß: ウスユキ草の一種、「気高い」と「白」から、ヨーロッパアルプスを代表する高山植物、スイスの国花、と出ています。

この7月1日の創立記念会にご参加くださる、団員・後援会員・団友、その他の知人たちにプレゼントしようと用意している歌集『歌はともだち』(教育芸術社)は、お正月に遊びに来た小一の男の子と一緒に歌おうと持参したものです。曲名のアイウエオ順になっていて、「エーデルワイス」はNo. 27です。日本語訳では「エーデルワイス」、原曲名としては(エーデルヴァイス)とあります。

1. エーデルワイス エーデルワイス

かわいい花よ
白い露に ぬれて 咲く花
高く青く 光る あの空より
明るくにおえ 明るくにおえ

2. エーデルワイス エーデルワイス

ほほ笑む花よ
悲しい心 なぐさめる 花
はるか アルプスの 峰の雪のように
輝け とわに 輝け とわに

(阪田寛夫・日本語訳)

この『歌はともだち』では、4分ノ3拍子、ハ長調で、白い花の写真と一緒に出ています。

残念ながら、ヨーロッパにも滞在したことのある私なのですが、今までにこの花の実を見たことは一度もありません。だから、これが一番好きな花だと言い切るわけにはゆかないのですが、「かわいい花」「ほほえむ花」という歌詞から想像すると、誇らしげにではなく、つつましく、群れをなして、雑草のような状態で咲くものようです。

私の好みでは、人間も、例えば好例から言えば J.S. バッハのように、見るからに内容のずっしりある偉人顔の人より、ごく普通の、ありふれた「おじさん」「おばさん」顔でありながら、尊い働きを提供しているような人のほうが、まずつき合い易いと想像できます。

つまり、「あなた方よりもっと、真理を心得ている」と自覚しているような人物よりも、誰とも何も比較判定しないで、ただ自然と一緒に安んじて生きていられる——そんな人を、日常の友人としたい思いです。

もし私が長わらずらいでもして、お見舞いして下さるということがあるとしたら、この「エーデルワイス」の歌を、大合唱ではなく、口ずさんでいただけたら、病氣中の私でもニコリするのは……。まあ、余り考えられない想像ですが——。この歌は、そんな風に私の中では生きています。

<次回公演予告>

クリスマス教会コンサート 2023

●12月2日(土) 14:00~、荻窪教会
(JR/メトロ丸ノ内線「荻窪駅」南口・徒歩8分)

●12月9日(土) 14:00~、三崎町教会
(JR「水道橋駅」東口・徒歩3分)

* * *

[管弦楽]ARS、[オルガン]田尻明葉、[指揮]大村恵美子

* * *

・J.S. バッハ《マニフィカト》と《クリスマス・オラトリオ》より、オーケストラつき合唱曲を中心にお届けします。
・とくに《クリ・オラ》では、恒例となったシングイン形式で、当日の合唱参加も歓迎(歌詞=独・英・日、自由)。
・両日とも同プログラム。入場は予約制の予定、詳細続報。

* * *

■新規団員募集中。合唱参加ご希望の方、7月の練習からご一緒ください。【お問い合わせは事務局へ。当月報タイトル欄参照】

戦争グッズ

安曇野閑人 大野 博人

1999年当時の国際政治のそうそうたる面々の写真と名前が印刷されている。クリントン米国大統領、ソラナ北大西洋条約機構（NATO）事務局長、ヴェドリヌ外相、オルブライト米国务長官……。新聞や雑誌ではない。トイレットペーパー。

そんな奇妙な品を見つけたのは、内戦が続く崩壊の危機に直面していた旧ユーゴ連邦セルビアの首都ベオグラード。そのころはコソボ紛争の真っ最中で、NATOが「人道介入」を掲げて、ほぼ毎晩、空爆を繰り返していた。

爆撃に踏み切った欧米指導者たちに対する、標的の街に暮らす人々からの文字どおり「クソ食らえ」というメッセージ。

そのときのユーゴ連邦大統領、ミロシェビッチはまぎれもない独裁者だった。紛争を招いたのは、彼の度しがたい支配欲でもあった。だから憎んだり、嫌ったりしているセルビア市民も少なくなかった。そうだとしても、自分の国が外国から武力で攻められると、人々の心はかたくなになる。

空爆下の街では、そんな気持ちがにじむようなグッズが、たくさん売られていた。トイレットペーパーはそのひとつ。強敵に向かって意地を見せているように、自虐の「やけクソ」気配もただよう。ほんとうは自国の大統領の顔を刷りたかったのかも。

強がりグッズを見かけたのはユーゴだけではない。その10年ほど前のイラクによるクウェート侵攻をきっかけにした湾岸戦争でも出回っていた。当時のイラクも独裁者サダム・フセイン大統領が支配する国だった。人々に政治的な自由はなかった。それでも、米国を中心とした「多国籍軍」が空爆を始めると、サダム・フセインの肖像をあしらったバッジやイラク軍がぶっ放すスカッド・ミサイルの置物が土産物店に並んだ。

もとより最先端兵器を備えた米軍などに、スカッドくらいで効果的な反撃は無理だ。そんなことわかっている。戦争を始めた自分たちの指導者の救いがたい愚かさもわかっている。けれども、結局、空爆の標的になるのは自分たちという不条理。

セルビアのトイレットペーパーは、おそろしく粗悪な紙を使っているし、スカッドの置物は、木片を適当に削って色を塗っただけのおざなりな代物。だけど、こんなものでも作って、憂さばらしするしかない人々の切なさは伝わる。

19世紀フランスの思想家、アレクシ・ド・トクヴィルの『アメリカのデモクラシー』は米国に生まれたばかりの民主主義社会をあざやかに描いた傑作ルポルタージュだ。そこで彼は、民主的な人民はつねに二つの

ことに苦勞するだろう、と予言している。

一つは戦争を始めること。もう一つは戦争を終わらせること。

当時のユーゴやイラクは民主的ではなかったが、人々が戦争に心をからめ取られてしまえば、やはり終わらせるのは簡単ではない。独裁の指導者も、負けて引き下がったときは、もって行き場のない怒りを抱え込んだ人々の反発を恐れるだろう。独裁者は戦争を始めるのに苦勞しないかもしれないが、終わらせるにはやっぱり苦勞することになる。

ロシアのプーチン大統領も引くに引けなくなっているのだろう。勝つことができないまま、幕を引こうとすれば、地位どころか財産や生命さえ脅かされるかもしれない。西側諸国の指導者たちも勝負がはっきりしない決着になれば、次の選挙があやういかも。どこでも指導者の頭にあるのは「勝つこと」ばかりで、「終わらせること」ではない。だから戦争は長引き、人々は終わらない戦争にさらにイライラを募らせる。悪循環。

今、トイレットペーパーを作るとしたら、だれの顔を刷りたくなるだろう。世界を見渡すととても1巻きでは足りそうにない。

（団友・後援会員、元朝日新聞記者）



写真
＜右＞湾岸戦争のときに
出回ったスカッド・
ミサイルのおきもの

＜下＞欧米の指導者の
顔を刷り込んだトイレ
ットペーパー

（筆者提供）



【編集後記】
マイナンバーは「私の番号」という意味。マイナカードは「認識票」ですか？ いな、きっと個人にとっても社会にとっても役立つシステムなのでしょう。ならば、マイナポイントなどという浅ましい餌で釣らずに、ゆっくり、じっくりと政権への信頼で説得して下さったら良い。一銭もかかりませんよ。（K）